日照不足・低温対策特報 2019・7月

2019年7月17日
JA中野市営農センター

6/7 梅雨入り後、日照不足・低温・多湿状態が続いています。この影響で、果実腐敗性病害の感染拡大や排水不良による生理障害発生が心配されます。ついては、下記を参考に対策を講じてください。

- 気象特記（6月）：気温（平年比：低）-0.6℃　降雨193%（極多）日照量65%（少）　下旬平均湿度85%（高）
- 気象特記（７月）：豪雨46.0㎜(7/4)　平均気温(平年比)-0.4℃　平均湿度80%（高）
- 注意報（気象庁）：今後２週間程度は日照不足・低温が続く見込みです。農作物の管理にご注意ください。

1. 果樹

① 共通

- **支柱立て・枝つり・徒長枝切り等を行い、受光態勢を良好にする。**
- **病害感染防止のため、薬剤の散布ムラがないようにする。また、散布間隔は10～14日以内を厳守する。**　＊品目毎の詳しい内容は各特報を参考にしてください。
- **排水対策を行い、園内が降雨で耐水しないように注意する。**

② ぶどう

- **【重要】園内が暗い場合は随時、新梢管理を実施する。**ただし、水回り直前に極端な新梢管理を行うと縮果症や日焼けが発生するので注意する。
- 黒とう病・べと病対策：今後の薬剤散布は10日間隔の厳守で進める。
- 冷夏の場合は糖度上昇・成熟遅延が心配される。ついては、適正管理・適正着果を徹底し、成熟促進に努める。

③ もも

- **【重要】着色不良、糖度不足が心配されるため、支柱立て・徒長枝整理により日照量を確保し、反射マルチを敷き着色向上に努める。**
- 着色が遅延し、果肉先行型になると予想されるため、収穫が遅れないよう熟度に注意しながら収穫を進める。
- 灰星病対策他：収穫前（除袋後）の防除を遅れずに実施する。被害果は早めに除去する。

④ りんご　＊過繁茂状態園が散見中です。この時期に徒長枝等の不要な枝は早めに除去ください。炭そ病・褐斑病感染拡大注意！

- 炭そ病対策：7月中旬（特散）のオーソサイド水和剤1,000倍等を至急散布する。
- 褐斑病対策：ベンレート水和剤2,000倍又はトップジンM水和剤1,000倍を定期散布に加用する。
- 花芽充実対策：葉面散布資材「葉友」2,000倍散布する。併せて次年度花芽候補に良く光を当てる。

2. 野菜・水稲・花き

① 共通

- **排水不良による土壌病害対策のため、園地が降雨で滞水しないように溝を掘り（明渠）排水対策を行う。**
- **低日照により樹勢低下が心配されるため、状況に応じて薬剤散布時にアミノ酸入りの葉面散布剤（アミノメリット特青、ハイプログリーン等）を散布し、樹勢維持を図る。**

② 野菜

- **アスパラガス**　茎枯れ病の二次感染が心配される。病斑の出ている茎は刈り取り園地外に運び出す。過繁茂とならないよう立茎数を整理し、農薬の薬液が内部まで届くようにする。
- **キュウリ**　低日照により、例年と比べ着果負荷が大きくなる。曲がり果は積極的に摘果し株の勢いを維持するよう努める。また、べと病、炭ソ病等の病害の発生が心配される。防除間隔が空きすぎないよう晴れ間を見て散布する。

③ 水稲　**【重要】いもち病対策**

- 昨年発生園：「穂いもち病」の予防として、7月中下旬に「コラトップジャンボ」等を散布する。
- 昨年無～小発園：いもち病の発生が確認された場合は、「オリブライト１キロ粒剤」等を散布する。

④ 花き

- **トルコギキョウ**　連日の低日射は、花芽の生育停止（ブラスチング、ブラインド）になりやすくなる。寒冷紗は曇天時開けて光が入るようにし、未設置の場合は、曇天後の強日射による花傷み防止のために展開できるように準備を進める。
- 施設品目：降雨によりハウス内の湿度が上がり灰色かび病や、立ち枯れ病が発生し始める。薬剤散布の間隔を詰めて発生を抑止するとともに、ハウス内の菌密度を下げる。降雨が続くようであれば、ハウスの外周からハウスの中に雨水が入らないように、ハウス外周の明渠を掘る。
- **アスター、コギク**　湿度が高いとさび病発生が心配される。発生初期には、治癒効果のあるストロビーフロアブル2,000倍を散布する。
- 露地品目：土壌内の水分が飽和状態になると、根腐れの心配がある。下葉の黄化や側枝の発生が少ない場合には葉面散布を行い、樹勢回復を図る。